

みらい

BERLIN

2013年4月号



ベルリンに春がくる
ワクワクする人生を選んで
ベルリンの風
日々是迷走中
ドイツのおばあちゃんレシピ

ベルリンに春がくる



「壁新聞」にちなみ、ベルリンの壁の話。いま私が住まうドイツの首都ベルリンは、23年前まで、社会主義の東ドイツが構築した「壁」により、東西に分割されていた。「万里の長城」に比べればはるかに短く、人間を封じ込めるには充分な「長壁」だった。ドイツ統一に伴いその「壁」も撤去されたのだが、意図的に160kmのうちのごく一部、1キロ半ほどを残した。その名残りの壁の片面を真っ白に塗って、キャンパス代わりにし、世界中の芸術家たちに思いおもいの作品を描いてもらっている。位置しているところが旧・東ベルリンで、最寄り駅名も東駅ということに因んで、通称「イーストサイド・ギャラリー」。でも、ひょっとしたら有名なミュージカル「ウエストサイド・ストーリー」との語呂合わせからの命名かもしれない。ところがつい最近、住宅および道路建設のために、市側がその壁の一部を撤去した。壁を貴重な歴史的芸術作品とみなす「壁存続派・撤去反対」の市民たち9千人が、3回にわたりデモを組織し、当局に訴えた。いま、建設計画は一時凍結されている。(註 3月中旬現在。今後の展開は不透明。)春先のいいニュース。ただ、ベルリンには「壁」ゆえに、苦しい体験をさせられた人も多くいて、どういう形であれ壁は目にしたくない、という声もある。「壁」をめぐるベルリンの人の気持ちは、まだまだ錯綜している。

若者に好かれる都市

そういう封鎖と分割都市ベルリンで、壁の時代も含め私は三十三回目の春を迎える。それ以前、ボンやミュンヘンで哲学を勉強したのち、日本に帰国。その後、縁あって、固いイメージのベルリンにきた。公務や小さな国際機関での仕事に携わりながら、「住めば都」の味を噛みしめてきた。住み始める前には、この都市について、頑迷な「プロイセン」の先入観があったが、現実はまだで逆、何でもありの自由で落ち着いた都市だ。その証拠に、ニューヨークやロンドン、パリは若者には

物価高と家賃高で住みにくいと、世界中の若いアーティストたちが、新天地を求めてベルリンにやってくる。そして異口同音に「ベルリンは住みやすい」と言う。確かにそうだろう、そうに違いないのだが、私の中では、生きのいい刺身と日本酒恋しさで、明日にでも日本に帰りたい気持ちがふつふつとしている。

日本の桜

「ふつと迎えるベルリンでの春だが、当地の春は「日本の桜」と共にやってくる。「壁崩壊」に伴い、TV朝日の提唱で、数年がかりで周辺に合計9300本ほどが植えられた。主にピンク系の八重桜で、一部は名所となり、桜祭りをするところもできている。ときどきその植樹祭に参加していた身からすれば、いまの生育ぶりに、よくぞここまでと、感慨深いものがある。実は本数だけなら、数万本の植樹も可能だったのだが、そこまでゆくと、「外来種による生態系の破壊」が進むとの異議が出て、ベルリン側は植樹の継続を中止した。本来、TV朝日は「壁の跡地」に沿って、桜を植えたかったのだが、壁跡地の本来の所有者の確認や新たな都市計画のさなかで、TV朝日の意思そのままには実現しなかった。善意がすべてとおる世の中でもないのだ。

夏時間への切り替え

さらに、当地での春到来で特筆すべきは、夏時間への切り替えだ。毎年、3月の最終日曜日の午前2時、時計が突然1時間先に進み、午前3時になる。いわゆる電波時計は、内臓アンテナが受信して、自動的に調整してくれるが、1時間早まる分、睡眠時間も1時間短くなる。1年に1回、少し辛い思いをする。ドイツで公式に夏時間導入が提唱されてから100年を経ているが、実現までには時間がかかった。戦後、東西二つのドイツの成立の際、東ドイツはモスクワ時間に従ったために、ドイツには二つの夏時間が存在、共通の夏時間は遠のいた。社会主義と資本主義の対立はドイツの夏時間にまで及んでいた。

エネルギー節約がきっかけ

ところが、1973年、ちょうど40年前、世界中が第4次中東戦争のあおりから、「石油危機」(オイルショック)に見舞われる。アラブ沿岸の石油輸出諸国が突然の原油の値上げと特定の国への禁輸を決めたため、世界中がパニックに陥った。ドイツも大混乱の中、政府も国民も、できるだけエネルギーを使わない方法を考えざるを得なくなる。その一つの手段が、日曜日の「ノー・マイカー」だ。当時、私は最初のドイツ留学時代で、ドイツ事情もよく分からない時期だったが、日曜日、一般の自家用車が道路から一斉に消えるこの禁止令は、実に新鮮だった。日曜日に、車が1台も走らない、雪で真っ白な大通りを、堂々と手を振って横切る。日曜日に来るのが楽しみになる。実に感動的で、印象深い日々になった。

このオイルショックは、欧州全体が本気で、エネルギー節約を考え始めるきっかけになった。その4年後に西、中央、東ヨーロッパそれぞれの夏時間が公式に導入され、今日に至っている。朝が早く、夜が長くなるために、外で過ごす時間が長くなる。そのぶん電灯など電力消費が節約される。

この夏時間に慣れると、「春よこい、早くこい」「歩きはじめた、みよちゃん」と同様な気持ちになり、積もる雪を見ながら、春を待ちわびている。それほど春への待望感は大いなのだが、私の本音は、夏時間への期待感なのではないかと疑うところがある。春到来と夏時間開始は、私の中では同義語でもあり、かつ太陽がいっぱい「夏を恋しがって」もいるようなのだ。

この日を楽しむ

何しろ、朝の3時過ぎには空がうす明るくなってくるし、盛夏には、夜の9時半まで外で読み物ができるくらいに、暗くなるのが遅い。ラテン語の言い草に「カペ・デー・エム」と言うのがある。きょうという日を



文: 生田千秋 撮影: 鈴木重季



ベルリンの風

文、撮影: 長谷川陽子



私はワーキングホリデー制度を利用して、ベルリンに住み、もうすぐ1年になります。ベルリンという街は、大都会でありながら自然や緑も多く、歴史の痕跡も多く身近に感じることが出来つつ、常に新しいものや人を受け入れている、自由な感覚の魅力的な所です。初めてこの地を歩いた時に見上げた空の広さと青さ、風の心地良さが、私がベルリンに来たことを歓迎してくれているようで、何ともくすぐったい気持ちになりました。

私の渡独した目的は、ベルリンに暮らしつつ色々なモノを観たり聴いたり感じたりすること、ヨーロッパの国々を旅する事でした。ドイツはヨーロッパの真ん中辺りで、色々な国に面していることもあり、他の国に行きやすい場所です。毎月1度、他の国へ行ったり、バックパッカーで国から国へと渡り歩いて、友達を訪ねていたりして、全てのヨーロッパでは無いけれど、大体行きたい所へは行くことが出来ました。

今まで行きたかった美術館で、観たかった絵画や彫刻や建築をみたり、聴きたかった音楽を聴いたり、ただその街を歩いて五感で感じたり、当地のものを食べたり、現地の人との触れ合いや、想像もしなかった風景に出会えたり、自然の素晴らしさに圧倒されたりという経験は、本当に生きている事を実感でき、世界はこんなにも素敵なんだと、自分で気付きさえすればいつでも、いくらでも感じられると分かりました。

そうして様々な国で、色々な体験をしてベルリンに戻ると、故郷に帰ってきたような安心感が、いつからか有りました。これと言って何がというのは分からないけれど、このベルリンの空気が肌に馴染むというか、歩いていて居心地がいいのです。歩いていて、居心地が良いというのは、日本ではあまり感じないことでした。

外では、日本よりも沢山の赤ちゃん連れの家族を見



たり、そしてお父さんがベビーカーを押している方が多かったり。天気の良い日には、近所の公園の芝生の上でご飯を食べたり、遊んだりして、貴重な暖かい晴れの日を存分に楽しもうとしていて、カフェではテラスが満席で、中はガラガラなこともよくあります。有機栽培の食品や、ベジタリアンやビーガン向けのレストランやカフェが圧倒的に多いのも特徴的で、ピオ専門のスーパーマーケットもいたるところにあります。土日には蚤の市が開かれていて、食器や衣類、家具などもリサイクル。古いものを捨てるのではなく、次に使いたい人にバトンタッチするだけです。新しい家に引っ越した時、家具を探しに行くのはお店ではなく、まず蚤の市に行ってみるのがベルリンスタイルかもしれません。2、3人で、大きな家具を運んでいるのを見かけたりします。

昔、ビールの醸造所だった所や下水処理場、駅舎や防空壕だった場所や公衆トイレ、廃墟となったアパートなどが、今はギャラリーやライブハウス、カフェやコモンサートホール、美術館、洋服屋さん等に変化している場所も多く、常に楽しませてくれる、また歴史を感じられる街でもあります。

人々は、良い意味で自分は自分、自立しながら自由を満喫して、時間の使い方、人生の愉しみ方を知っている気がします。ベルリンは、世界中から色々な人達が集まって来ていて、それぞれの生活、文化があります。自分が当たり前だと思ふこともそうでは無かったり、価値観を覆されたり、固定観念を思い知らされたり、日々新しい発見があり、そういったこと出てくる気持ちに、客観的に自分を見つめられる気がします。

もうすぐ日本に帰りますが、今まで経験してきた事を踏まえた上で、どんな風に新しく、自分の故郷を感じられるか楽しみです。

ワクワクする人生を 選んで



まさか自分が公務員を辞め、ドイツに住むなんて夢にも思っていませんでした。

家系に公務員が多いことから、高校に入るときにはすでに将来は公務員になることを決めていました。安定した収入で、失業の心配もなく、退職後の保障もされている。こんなに最高の職はないと思ったし、『公務員は5時に帰れる』というよくわからない幻想をいだいていましたね。

なんでこんなことを思っていた自分が、いまドイツにいるのか……。

当時、私は他の公務員の方とは違い『なぜこの省庁で働きたいのか』という明確な理由を持っていませんでした。ただ将来の安定のために選んだだけ。そのときは確かにそれでいいと思っていましたし、仕事中心に生きることをくだらないとすら思っていたような気がします。社会人3年目になったときから『なぜここで働いているか』考えるようになり、もっと単純に『こんな人生って楽しい？』という思いが、日を経つにつれて強くなっていきました。

じゃあ、いったい自分の人生の中で何をしたいんだろう。とりあえず自分の頭に浮かんだ、これからやりたいことを書きまくりました。これ意外と難しいんですよ、自分が成し遂げたいことや得たいことを書くのって。大人になると無意識にできるかできないかを決め付けてしまうようです。

- ・無重力体験をすること
- ・オーロラを見ること
- ・ホノルルマラソンを完走すること……など

とにかく自分がワクワクするな……ってことをひたすら書きました。

『英語以外に語学を習得すること』、『いろいろな国の人と友達になること』、『海外で働くこと』を含めて、90個以上のやりたいことを書き終えたときに仕事をやめる決心をして、仕事をやめた翌月にはもうドイツにいました。ドイツには仕事をやめる前に1人で一周したこともあって、どんな国かはすでに知っていました。特に印象に残っていたのはベルリンで、緑が多くあり、おしゃれなカフェやレストランもいたるところにあって、かつ世界的な芸術都市であること。さらに物価も日本と比べると安く、海外に長く住むならベルリンだとすぐに決めることができました。

しかし、すぐに大きな壁にぶつかります。語学です。日本では確かに英語は学びますが、試験に受かるための受験英語です。私もカタコトの英語しか話せませんし、さらに大学では中国語を専攻していたため、当然ドイツ語なんて知りません。1から新しい語学を学ぶことが、こんなに難しいことだとは思いませんでした。後で知りましたが、ドイツ語は語学の中でも習得が非常に難しいようです……。

あくまで語学は「コミュニケーションの道具です。『なんのために』ドイツ語を学ぶのか？それが明確でないと、いつまで経ってもレベルは上がりません。そこで私は大学生になることを目標にしました。大学では当然ドイツ語で授業が行われるわけで、さらに英語も必要になってきます。日本とは違い、入るよりも卒業するまでが非常に難しくなっています。しかし自分で書いた『海外で働く』ためには、それぐらいの努力が必要であり、一番の近道とも思っています。

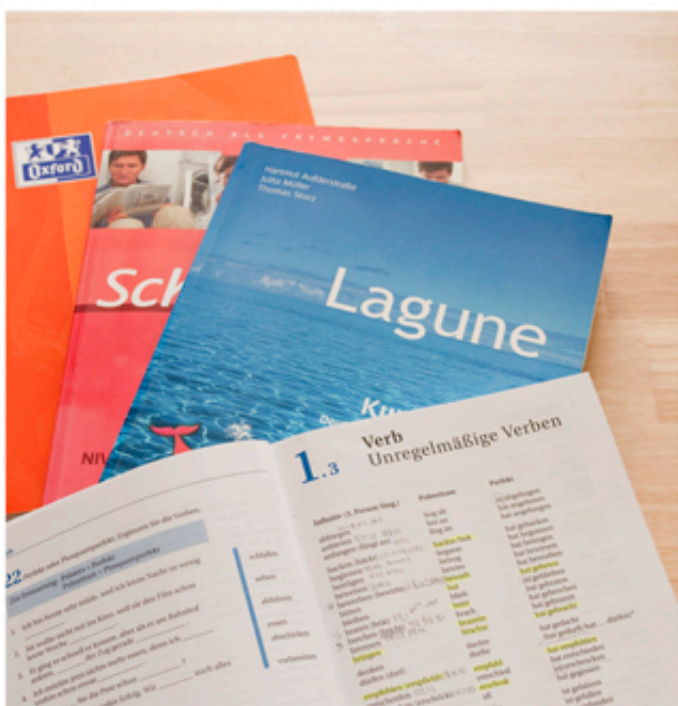
ドイツの大学は、いまでも授業料が無料のところもありません。費用がかかっても、日本と比べると非常に安いので、学びたいことがある人にとっては、本当にすばらしい国だと思います。語学学校も同じく1ヶ月

1万5千円ぐらいから受けられるところもあります。

最後に、もし海外に少しでも興味があるのであれば、1度住んでみることをおすすめします。インターネットで得た知識や友達から聞いた話など、まったく意味がありません。自分で見て、聞いて、感じたことがすべてであり、事実です。できるはずないと思ったことが、やってみたら意外に簡単で驚くことでしょう。

『何かを学ぶためには、自分で経験する以上にいい方法は無い。』
私が好きなアインシュタインの言葉です。

偉そうなことを言っていますが、私もまだまだ夢の途中です。これからも多くの事を学び、挑戦していきたいと思えます。



日々是迷走中



2012年に行った展覧会は3つ。

3月、日本人アーティスト数人のグループ展で、ベルリン西側のギャラリーにて、写真6点とスライドショーの展覧。8月、ベルリン東側にある、ブラジル人の可愛いカフェで個展。お店の雰囲気似合うような可愛らしい写真40点程を展示。9月、ドイツ人のギャラリーサロンにて、ドイツ人2人、ポーランド人1人との計4人のグループ展にて新作5点を出展。その間に、3年使用してきたアトリエが、建物もろとも閉鎖、制作場所を探して右往左往するという出来事もあり、こうして振り返ってみると、昨年は、特に、夏頃までは、作品制作と展覧会に追われた日々だった。

一番大変だったのは8月。

8月の個展で展示した作品は、出来上がっている旧作と数点の新作。それ故、制作にかかる負担はあまりなかったものの、展示点数が多かったので、会場レイアウト、額装、搬入作業などに、それなりの時間がとられ、気づけば9月のグループ展に出展する新作の制作状況が、冷や汗ものの恐ろしい事になっていた。という怒濤の一ヶ月。

展示の話は9ヶ月前に貰っていた。

9月のグループ展出展の話を買ったのは、一昨年の暮れ。同じギャラリーサロンでドイツ人との2人展をした時に、その展覧会のクロージングパーティの際、次の年の展示予定の一つとして、9月に今度は4人展として行いたい事、展覧会のテーマ、どの作家、等々すでに決定。その時点で明確な新作プランはなかったものの、前々からやってみたい事はあったので、それを形にする事に。二人展終了と同時に、新作のためにネットや街中、様々な場所、手段でリサーチ開始。

明確でないものをドイツ語で説明。

その数ヶ月後、一緒に展示する予定のアーティスト達とギャラリーと最初の打ち合わせ。それぞれが展示する予定の作品の説明と、展示場所の決定。のはずが、厄介だったのが、作品説明。今回、作品のコンセプトのベースに『五行思想(全ての物は木、火、土、金、水の五種類の元素から成り立ち、互いに影響を与え合い、変化し、循環する。という自然哲学の思想)』と『色聴所有者(音に色を見る事が出来る共感覚を持っている人)』に見えている色の視覚化』という一般的でないものをして見せるため、まずは、その部分から、懇切丁寧に説明。しかし、ヨーロッパでは馴染みの薄い五行思想と、知っている人があまりいない色聴。そして、相手は、少しでも分からない部分があると、容赦なく質問攻めにするドイツ人。この時点では、まだ明確な作品の仕上がりが予想がなかったため、どうしても、説明も曖昧になりがち。あらかじめ用意していた制作用の資料をまとめたノートや、作品サンプルも広げながら、次々と飛んで来るギャラリースタッフからの質問に、冷や汗をかきながら、あの手この手で説明するものの、やはりいまいち理解出来なかった様で、次の打ち合わせまでに、展示作品を1つ仕上げ、見せる事を宿題とされて、最初の打ち合わせは終了。

ひたすら制作の日々。

そんな訳で、制作ペースを上げざるを得なくなり、加えて、展覧会のフライヤーデザインを任せられ、展覧会前にやることだらけの夏のベルリン。ようやくやってきた、一番気持ちいい季節のなか、他の出展アーティスト達と、フライヤー用のデータについてのやりとり、ギャラリースタッフとのやりとり、作品制作などで、日を追う毎にアトリエに籠る時間が長くなり、気づけば、家には寝に帰るだけの日々に突入。展覧会搬入日まで、あと数週間。

そして、展覧会初日。

搬入数日前から、時間的にどう頑張っても、一人では展示までに間に合わない事が判明。心優しい友人達に泣きついて、最後の仕上げに必要な細かな部分を手伝ってもらい、なんとか展覧会開催2日前に完成、そして、即搬入。

写真に色鮮やかな刺繍糸を組み合わせた5点の組作品は、星形に配置し、五行思想や色聴といった、いくつかの作品コンセプトが何層にも重なり、複雑すぎるということ、普段は展示しない、制作ノートも一緒に展示。老若男女様々な人達が来てくれて、制作に使った刺繍糸の上に置かれた制作ノートと、壁にかけられた作品を熱心に交互に見てくれる人が多かったのが印象的な、今回の展覧会。制作方法や、コンセプトの組み立てなど、今までとは違う手法を試みたからこそ、見えてきた今後の課題。今、とりかかっている新作にどう生かされるのか、日々手探りしながら、今日もベルリンで迷走中。



ドイツのおばあちゃんレシピ 赤ワインケーキ

ドイツ 生活最初の9ヶ月を過ごした、南ドイツのフライブルグという小さな街でお世話になったファミリーで、教えてもらったレシピです。濃厚どっしり、名前のとおり、赤ワインにも合うパウンドケーキです。混ぜていだけなので、材料の分量も手順も適当でも、オーブンの温度と焼き時間さえ間違わなければ、美味しく出来ます 多分。どこに持って行っても、ドイツでは必ず喜ばれる鉄板レシピです。ドイツの人は、パンでも何でも、濃厚どっしり好きだしね。



材料

小麦粉	250g
バターか、マーガリン	250g
砂糖	200g
バニラ砂糖	1袋
卵	4個
シナモン	小さじ1
カカオパウダー	小さじ1
ベーキングパウダー	小さじ1
赤ワイン	125ml
チョコレート	125 - 150g

作り方

1. バターをケーキの型に塗るか、クッキングペーパーを敷いて、底にパン粉を敷く。
2. バターをクリーム状にし、卵、砂糖、バニラ砂糖、シナモン、カカオをぐるぐるぐるぐる混ぜていく。
3. 小麦粉とベーキングパウダーをふるいながら、2に混ぜていく。
4. 赤ワインをどぼどぼ入れる。
5. ざくざくがりがり適当に削ったチョコレートをざっくり混ぜる。
6. 190度に温めておいた、熱々のオーブンで50分から60分程度じっくり焼く。





撮影: 鈴木亜季

編集後記

母の実家が岩手県大船渡市にあり、幼い頃から夏休みや冬休みなど、年に何度も訪れていた大好きな祖母の家。震災直後に一時帰国し、変わってしまった大好きな街を、被害を免れた伯母夫婦と一緒にまわり、大船渡市と陸前高田市の様々なところを撮影しました。

ベルリンに戻ってから、被災地の現状をこちらで一人でも多くの人に伝えるべく、撮影した写真を何度か展覧会に出展しました。インターネットが発達し、日本を離れていても、即時に日本の様々な出来事を知る事が出来る時代ですが、大まかな情報は手に入っても、現地のもっと個人の目線で得られる情報、息づかいが伝わる情報というのは、なかなか手に入れる事が出来ません。逆もまた然りで、アートとカルチャーが盛んな街、若者に人気の街として、ベルリンに関する一通りの情報は、雑誌やインターネットで簡単に手に入れる事が出来ませんが、現地に住む人達それぞれの生活や想いは、なかなか伝える事が出来ません。そこで、今回、敢えて街としてのベルリンの紹介は省き、ベルリンに住む様々な立場の人達に、それぞれの目線で、ベルリンでの生活、想いを書いてもらいました。

鈴木亜季

ライター紹介

鈴木亜季

2007年よりドイツ在住。写真家兼アーティスト。「みらい」ベルリン編コーディネーター。

生田千秋

1970年代よりドイツ在住。壁崩壊を目の前で体験。ベルリン日独センターなどで30年以上公務に従事した。

岡村大輔

2011年よりドイツ在住。日本での国土交通省での仕事を経て、現在、ベルリンの大学院生になるべく日々勉強中。

長谷川陽子

2012年よりワーキングホリデービザにてドイツ在住。1年間のベルリン滞在中に14カ国50都市を旅行。

Special thanks

許育華(Hsu Yuhua)

2011年よりドイツ在住。ジャーナリスト兼編集者。台湾出身。数多くの雑誌に寄稿。